

「帯江研」だより

Vol.2

2021/2 発行

帯江鉱山研究会事務局
岡山市東区益野町295-15 坂本方
E-メール
obieken913@yahoo.co.jp



帯江鉱山火力発電所の煉瓦煙突

(撮影者 羽原明倫)

長崎の鮑ノ浦あくのうらに1861(文久元)年、三菱重工長崎造船所の前身となる長崎製鉄所が完成した。そのときオランダ海軍機関方士官ヘンドリック・ハルデスが瓦職人に焼かせた「こんやく煉瓦」をして、日本の建築用煉瓦の嚆矢とする。銀座に赤煉瓦街ができ、「一丁倫敦」と呼ばれた東京駅前の三菱オフィス群、法務省などの官庁建築が煉瓦で建てられたように、煉瓦は明治時代の建築資材の雄であった。その需要を大きく拡大させたのは鉄道工事こうしで、関西では泉州が一大生産地になった。

煉瓦煙突の形はおおむね方形(四角形)、八角形、丸形に区分できる。方形は酒・味噌・醤油などの醸造業、風呂屋、焼物窯に使われ、高さは50尺(15m)以下が多い。福島県喜多方市の大和川酒造の煙突のような六角形も存在する。50尺から100尺(30m)の煙突は八角形、100尺より高い煙突は丸形とされた。1908(明治41)年、三井三池鉱業所(福岡県田川市)に造られた高さ45.45mの2基は丸形の代表である。

岡山県初の煉瓦建造物は、1881(明治14)年に創業した玉島紡績所いっちようろんどんであると思われ、煙突は八角形煉瓦造であった。跡地には堺煉瓦会社の刻印煉瓦がある。1882(明治15)年と1889(明治22)年に操業を始めた下村紡績所と倉敷紡績所倉敷工場の煙突も八角形煉瓦造であった。

帯江鉱山火力発電所(倉敷市黒崎)の煙突も八角形煉瓦造である。1971(昭和46)年11月23日付「倉敷新聞」が「福島に帯江鉱山用の発電所が建設されたのは倉敷町より三年ほど早かった」と報じ、倉敷電灯の開業式が1910(明治43)年であったことから、1907(明治40)年ごろの建造であると思われる。煙突は五つに分断され、高さは基礎部分が895mm(煉瓦14段)であるほか、4,920mm(煉瓦70段)、3,500mm(49段)、1,720mm(23段)、600mm(8段)である。三野浄水場(岡山市北区)や倉敷紡績所倉敷工場、三石耐火煉瓦(備前市)などの八角形煉瓦造煙突から推定すると、高さは24mから27mであったと思われる。積みされている普通煉瓦の平均寸法

史愛好家らが集まって帯江鉱山研究会が出来ました。二〇二〇年秋に岡山市内で産声を挙げた会で、略称は「帯江研」と言います。会では有志の皆さんの参加を歓迎しています。

銅山や産業遺産に興味を持つ研究者、歴史愛好家らが集まって帯江鉱山研究会が出来ました。二〇二〇年秋に岡山市内で産声を挙げた会で、略称は「帯江研」と言います。会では有志の皆さんの参加を歓迎しています。

裏面へ →

は220×105×60mm、イギリス積み、引き込み目地である。基部から頭部に向けて塔身を細くするため、長手の寸法を220mm未満とした調整用煉瓦も使われている。

八つの角には2種類の異型煉瓦が使われている。一つは野球のホームベースのような五角形で、95mm 2辺、150mm 2辺、底辺60mm。もう一つは145mm 2辺、105mm 2辺、100mm 2辺の「くの字型」である。どちらも犬島製煉所の八角形煙突の煉瓦とほぼ同寸であるが、かつて猿曳山頂にあった八角形煙突の煉瓦より小ぶりである。山頂の煙突の写真は、『明治四十三年陸軍特別大演習記念寫真帖(岡山県、1910年)』に掲載されており、1基は高さ125尺(37.88m、前掲「倉敷新聞」)であったという。

帯江鉱山火力発電所の煙突は五つに分断され、その一つに「高さ」約570mm(煉瓦10段)分、幅約570mmの破損箇所がある。そこに打撃を与えて倒したのかもしれない。猿曳山山頂の煉瓦煙突は、第二次世界大戦中の1943(昭和18)年か1944年、空爆の目標にならないよう破壊されたといわれているが、解体方法はわからない。『明治四十三年陸軍特別大演習記念寫真帖』の写真を見ると、福岡県朝倉市甘木の平田産業に現存する煙突によく似ている。製煉所からの煙道跡も写っている。平田産業の煉瓦煙突は、塔身の外側に足場を組むのではなく、内部から積み上げていったというから、帯江鉱山の煉瓦煙突も同じように造られた可能性がある。(小西伸彦)

古ミシン

おびえナベ No.2

我が家にある古ミシン。曾祖母の柚(そま)がアメリカから持って帰ったシンガーミシン。昭和40代まで母がガタゴト踏んで、私も小さいとき玩具代わりに遊んだ思い出がある。色々な衣類など踏みながら縫っていたものだ。母親は元高等学校家庭科の教員だったから洋裁は得意だったのだろう。小さい時の服はいつもこのミシンから生まれていた。白寿を迎えた今でも針と糸で自分の衣類を繕っている。製造番号G5028720とミシン台座に刻印されている。これを頼りにシンガーミシンHPで調べるとちゃんと製造年代が載っている。1916年(大正5年)アメリカ製で、業務用の貴重なミシンだそうだ。ついでに当時使っていたメジャーも残っていて、サンフランシスコの名前が刻まれている。明治38年に10年間働いていた帯江鉱山を辞した鉄之介は、当時犬養毅先生の推薦状を持って、柚と義弟彦太郎を伴ってアメリカ・サンフランシスコに渡米し市民権を得たと、鉄之介の唯一の子ズ子(祖母)は話していた。サンフランシスコでの10年間の鉄之介の活動はほとんど情報を知らないが、写真から洋服の仕立てとクリーニング業をしていたようだ。従ってミシンは生計を立てる主役として大活躍していたはずである。しかし、鉄之介は1913年に病を経て帰国している。その後新たに購入したことになる。柚と弟彦太郎は14年後に帰国している。住所は桑港サター街2363番地と写真裏に記載されている。私の弟が学会でサンフランシスコに行った便に訪れたが、現在は病院の敷地の一部になっていることを確認している。(近藤修六)

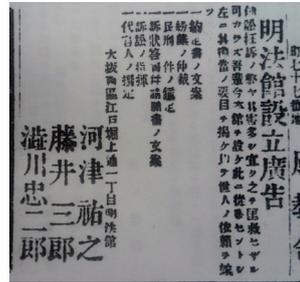


注)『高梁川178号』に坂本昇氏が「帯江鉱山と近藤鉄之介」と題して投稿しています。

坂本金弥を語る

■ 2 ■

一遊学中の公安沙汰



手許に一通の手紙(写し)が残されている。坂本金弥(以下「金弥」)が岡山在住の父・弥七郎に宛てたもので、文面から関西遊学中であった金弥の公

安沙汰の出来事が知れる興味深い資料である。内容の紹介をする前に、金弥が関西遊学に至った経緯などを少し触れておきたい。この時期、金弥をめぐる動静は正直よく分からず、『岡山市史 人物編』が語るのが頼り。それによれば金弥は「大坂に出て浪川忠次(二郎)の経営する仏蘭西法律塾に入って勉強」したという。その浪川という人物、当時は司法省から大阪上等裁判所へ派遣される一方、大阪法学舎を開業(十五年四月)、翌年二月には裁判所を退官して法律事務所・明法館(山陽新報に設立広告、明治十六・四・二十二)を開設した人である。岡山縣商法講習所を修えた金弥がその時分、心ある若者の多くが夢見たように、次のステップとして法律を学ぶことを志し、大阪へ出て法学舎か明法館で学んだのだろう。

しかし、手紙の日付はというと、十七年も押し迫った大晦日付。ちょうど前年には大阪事件が起きた年で、文面もただならぬ気配を漂わす。「岡山出立後八警察署ニ於テ種々探偵致居候由」これを見ると、金弥は何らかの容疑で警察に呼ばれたのか。十七年といえは前年に引き続き、それこそ国内外で過激事件が相次いだ。十月には自由党も解党大会に向けて同党幹部らが続々大阪入りするなど、自由民権運動家の動向は逐一、私服巡査が内定。世情不安に揺れていた頃である。そうした志士政客の間を金弥は、あるいは出入りしていたのか。それが公安の監視の目に触れる一因であったのか。だが、金弥は手紙の中で、「こう綴る。「私ニ於テハ何モ犯罪ハ無之(略)向後トテモ罪ヲ犯ス積リハ更ニ無御座候」。自らの身の潔白をきっぱりと語り、正月明けには岡山へ帰郷する」と結んでいるのである。この手紙で、これまで良く分からなかった金弥の関西での足跡の一端が掴めた。同時に親しいの、やさしい心根を持った青年は近所で評判だった孝行息子の姿と重なるようだ。(坂本昇)

ニュース通信



◇20・11・15 臨時例会

岡山・きらめきプラザで会員9人が出席。第1回例会など帯江研の具体的活動や運営について協議した。第1回例会は中庄事務局の手配のもと、21年1月24日に例会報告・現地説明会の形で実施することなど決めた。=写真

◇例会報告調査

初年度該当者は小西伸彦、坂本昇両氏に。新型コロナウイルス沈静下の状況を見ながら、小西氏は京都・住友史料館を訪ね、別子鉱山惣開製煉所と帯江鉱山間の買鉱資料を求めて両者の関わりを追究。坂本氏は「中民」3代の中で特に事績の不明な権三郎について出身地・井原市や三石で動静を探り、実像を浮き彫りにしたいとしている。

◇21・1・9 第1回例会の延期決める

コロナ禍の市中感染拡大による社会的状況を受け、役員会は24日開催予定だった第1回例会延期を決定、小西代表の「延期のおしらせ」を会員各位に周知した。